2013（平成25）年
3月1日
第142号
毎月発行
毎月第４月曜日は休館日です

西東京市 公民館だより

編　集
公民館だより編集室
発　行
西東京市公民館

柳沢公民館　柳沢1-15-1　☎042・464・8211　kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館　南町5-6-11　☎042・461・1170　tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館　芝久保町5-4-48　☎042・461・9825　shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp
谷戸公民館　谷戸町1-17-2　☎042・421・3855　yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館　ひばりが丘2-3-4　☎042・424・3011　hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館　東町3-14-30　☎042・421・1125　ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

3・11東日本大震災から2年
被災経験から学んだこと

昨年の12月9日(日)に第50回東京都公民館研究大会が開催され、西東京市からも市民、公運審委員、職員が参加しました。石井山竜平（いしいやまりゅうへい）さんによる基調講演「公民館は地域の絆」の中から、その一部をご紹介します。

東北大学大学院教育学研究科准教授　石井山竜平さん
専門は社会教育。震災後は、仙台市三本塚地区の地域再建学習に寄り添うほか、震災経験がいかなる学習経験となっているのかを各地で検証。
※詳細は編著『東日本大震災と社会教育』国土社／２０１２年にて

大人が学ぶということ

東北大学で担当している成人教育論の授業の中で、黒澤明監督の『生きる』という映画を観せることがあります。「大人が学ぶ」というダイナミズムをこれほどみごとに描いている映画はないと思います。

アンラーン「unlearn」という言葉があります。これまで学んできたものを一旦捨てて、あらたな価値観と行動性を再構成する営みが、この映画には描かれています。なぜこの話をするかというと、東日本大震災以後の被災地の経験は、まさに「unlearn」の過程であるように思うからです。

被災経験から生み出されたもの

被災地での模索のなかに、これこそこれからの社会教育の姿ではないかという事例が生み出されています。たとえば、宮城県亘理（わたり）町に馬場照子さんが開設した「亘理（わたり）いちごっこ」というコミュニティカフェです。被災者には無料でしっかりした食事を提供し、ボランティアからはお金をもらう。被災当事者が本音で語れる環境を用意し、そうした言葉に学ぼうとする姿勢が貫かれた取り組みです。

震災から3か月後の6月頃、支援を続けることが被災者の自立の妨げになるという懸念の声が出され、支援の引き際が議論され始めた時期、馬場さんは次のように語りました。

「避難所から出られない人に『なんでまだいるの？』というまなざしがあるけれど、みんないろいろな理由があって出られないでいる。これだけ多くを失った人たちに『今はゆったりしてね』となぜ言えないのか。自立を声高に言う人に聞きたい。一度でもそうした人と話したことがありますか」と。ただ「支援が必要な人は声を上げる元気すらない。だからそれを吸い上げる営みが必要なんです」。

ボランティアについても、時には善意の押しつけになっているケースが問題となり始めていた時期、馬場さんは、「どんなにミスマッチなボランティアがあったとしても、私たちはその善意を、それが求められているところを探してつなげていかないといけない。少しでももうボランティアはいらないんだというメッセージを被災地から出してはいけないんです」と。

被災地で声をあげられない程傷ついた人のおかれた状況と思いを「知る」ということ。そうして知り得たことを全国の善意に「伝え」「つなげる」ということ。そのことにさらに踏み出すこのコミュニティカフェを、私は新たな学習装置だと見ています。

日常の喪失と再起

被災地で人々が喪失したものはひとことで表現すれば「日常」です。これまで当たり前にあったもの、当たり前にいた人、疑ったことのなかった価値観、それが奪われ、もとには戻らないという現実です。

そうした事態にありながら、私たちは被災地で「多くの善意に支えられながら生活を再建した過程で、新たな価値観を得た」とするたくさんの発言を聞いてきました。

街が津波にやられ、壊滅的な事態でまだまともに道がない段階から家の修繕を家族で始めたE・Kさん。義援金で「幸運にも」中古のショベルカーを購入でき、それを駆使して生活を再建してきました。瓦礫（がれき）が未だ撤去されていない日々を思い出されながら、「もしも同じような事態が起こったなら、ぼくはこのショベルカーでどこにでもいきます。どこにでも」と、声を詰まらせながら語られました。

私たちが被災地から学んだこと そして希望

被災地では、多くの人が抱えきれないほどの悲しみ、許しきれない憎しみ、果たせなかった無念、拭（ぬぐ）い去ることのできない後悔など、大変な辛（つら）さの中で生きています。しかしそれだけではない、返しきれないほど支えてもらったことへの感謝、厳しさをくぐり抜けたからこその強さ、痛みを知ったことで獲得された他者の痛みへの共感力・想像力、新たな価値観への確信など、未曽有（みぞう）のことが学び取られています。それは、被災地だけの財産ではない。今は、それをより広いつながりの中で流通・共有させる新しい学びの契機です。

思うに希望とは、
もともとあるものともいえぬし、
ないものともいえない。
それは地上の道のようなものである。
もともと地上には道はない。
歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。（魯迅『故郷』より）

未来に通じる道になるべきところに踏み出す、そうした主体に互いを育てあう、そんな社会教育を共に追求していきたいものです。

サークル訪問

人の声だけで奏でる♪ アカペラ西東京ハミングバード

日曜日の朝、ひばりが丘公民館の集会室で車座に座っていたのは、20代から30代の若者たち。ミーティングで気合いを入れた後、ピアノの周りを囲むように立ちます。鍵盤を叩いて指導するのは中村高生（たかお）さん。メンバーたちがンー、とハミングをして音程をとります。

「口の中をペタンとして！」「にゃーお♪」「イメージとしてはセレブな猫で！」など、中村さんの声かけに応えて、発声練習が続きます。

そして歌い始めるのは「となりのトトロ」。主旋律のほか、ベースやドラムの音も肉声だけで構成します。

「アカペラ」とは、楽器の伴奏なしで人の声だけで演奏することで、近年、テレビ番組の影響もあり、若い世代の間で人気が高まっています。

ひばりが丘公民館の主催講座「アカペラでハモろうPart（パート）2」が開催されたのは、平成22年10月～12月のことでした。その参加者が、講座終了後も続けたいと立ち上げたのが「アカペラ西東京ハミングバード」です。

現在のメンバーは7人。月3～4回活動しています。らいおんハート、Last（ラスト）Christmas（クリスマス）、The（ザ）Loco（ロコ）・motion（モーション）など、レパートリーも増えました。

「自分のパートに責任を持って歌うところに、大変さと楽しさがあります」

「社会人ということで、仕事のストレスもあるけど、この場所に来て皆でハモると楽しくて、ストレス解消にもなっている」

「私は楽譜も読めないし、音楽もわからないけど、とにかく皆といっしょに歌えるのが楽しい！」と、メンバーたち。

代表の昆野さんは夫婦で参加しています。

「代表としてグループを盛り立てようとがんばっている夫の姿が見られる場にもなっている」と妻の綾乃さん。

昆野さんは「この2年の間にはいろいろなことがあったけど、地域のこういう空間をなくしたくないという思いが強くて、乗り越えてきました。これからもメンバー皆でアイデアを出し合いながら、いろいろなことにチャレンジしていきたいです」と力強く語ってくれました。

今年の「ひばりが丘フェスティバル」でも演奏します。いっしょに演奏する仲間も募集中。入会の相談やステージの依頼は、次のメールアドレスに。hummingbird_acappella@yahoo.co.jp